

基盤を総括することにする。

西地区では、中心集落中を除いて、集落は点在している。串以外、江戸時代後期以降の開拓集落であるせいか、各集落（与修、串、正野）の独立性は高い。各集落に小学校があり、5軒ずつほどの商店もある。岬にあって、あわびの好漁場を抱えるため、伝統的に漁業が盛んだ。養蓄池の利用によって、出荷調整も行っており、漁業全体の純生産は伸びている。そのせいか、この地区の人口減は緩慢で、各集落とも約400人の人口を保っている。

中央地区、東北地区は、どちらも古くから（江戸時代以前から）の首邑を持ち、生活圏、産業圏としての性格も似ているが、生活、産業両面で中央地区が優位にある。

各中心集落の中心地機能を見ても、中央地区の三崎と東北地区の二名津とでは落差が激しい。前者は人口1,677人（昭和60年）、商店数50（昭和57年）なのに対し、後者は人口674人（同年）、商店数17（昭和57年）だ。

主業は両地区とも柑橘栽培だが、中央地区が南側湾岸斜面という栽培適地にあるのに対し、東北地区は北側斜面という不適地にある。柑橘栽培の

歴史も中央地区で古い。生産量が中央地区の方が多いのも無理ないことと思われる。

人口減が中央地区で緩慢で、東北地区で顕著なのは、やはり、上の二つの事情ゆえのことかもしれない。昭和40年の人口は中央地区、3,562人、東北地区2,792人だが、昭和60年の人口は前者2,366人、後者1,360人だ。

東南地区と呼んだのは、ただ一つ、名取地区のことだ。ここは江戸時代初期、宇和島藩の軍用地として開け、三崎町内で孤立した集落であった。今も他集落への交通は不便で、人流も乏しいようだ（商業統計から）。主業は柑橘生産だが南風に面する斜面にあり、生活環境は人口の割に充実しているが、孤立性も高いので、人口減は著しい。昭和40年973人、昭和60年445人だ。

最後に三崎町の生活基盤を総括すると、まず三崎町全体の主産業は農業（特に柑橘栽培）、漁業であり、生活環境の上で、その中心は三崎集落にある。しかし、産業、生活圏は四分できる。その四地区が自然、歴史条件から見た地域区分、人口変化から見た地域区分と一致することから、自然、歴史条件と現在の生活基盤、生活基盤と人口変化との因果、相関を見出すことができる。

江の川上流域の水田の用水源

川 路 正 子

中国山地のふところに位置する江の川上流域は、山がちな地域で平地が少ないため、水田は谷間の傾斜地に所狭しと広がり、山と棚田という取り合わせがこの地域の卓越した景観となっている。本論は、江の川上流域を研究対象地域とし、水田の用水源の実態として構成、分布、立地要因を考察し、更に用水源別の取水施設や水利慣行及び用水の確保状態をみることにより、利用に当たっての各用水源の特性を明らかにすることを目的とする。

研究の方法は、フィールドにおける観察と聞き取り調査を主体とし、加えて統計資料や文献の研究も合わせて行った。

研究の結果、江の川上流域の三大基本用水源は河川、溜池、天水その他で、構成は溜池と天水そ

の他、河川と溜池の複合用水源を含めて5つのタイプがみられた。地下水はなく、複合も二重のみであった。用水源の分布状態は、本地域の中央部分に溜池水源が広がり、その外縁に溜池と天水その他複合水源が分布し、両端に天水その他水源が分布するという左右対称な形状を呈している。この分布と地形との相関は明らかで、地形は水源の重要な立地要因であるといえる。溜池水源は三次盆地と世羅台地とにまたがって分布し、それをはさんで東部の作木山地付近と西部の神石高原が天水その他水源を形成している。すなわち、盆地や台地の比較的平坦地で溜池がつくられ易く、山地や高原といった急傾斜地では、雨水や出水などの天水その他に依存する他ないと思われる。両者の複合水源は、はっきりとしたまとまりはないが、

溜池水源と天水その他水源との漸移地帯となっている。

次に利用の実態は次のとおりである。天水その他水源の取水施設は零細で個人に管理され水利組織はない。水の確保状態は出水が豊富かどうかにより集落によって異なるが、一般に用水不足であり節水が行われている。施設・確保状態ともに進歩はほとんどなく、水量の乏しさは生活及び農業経営を大きく制約している。

本地域の溜池の築造は江戸初期に始まり、水田開発に伴って増加した。谷を堰止めた形が大部分で皿池は数えるほどしかない。水利組織は、溜池ごとにその受益者がつくる田子組合が一般的で、水の配分、管理は樋守と呼ばれる水当番に任されている。現在も絶対量の不足はあるが、昔のように干魃に悩まされることは少なくなっている。水

需要の増加は、堰のかさ上げによって対処してきたが、減反等により需要が安定した現在は、圃場整備に伴う溜池の統合など合理的な利用の傾向がみられた。

河川の取水は、井堰と戦後登場したポンプ揚水機によって行われる。水利権は井堰毎に区切られ今も守られており、水利組合がよく発達している。井堰の場合、水の配分規定は特になく水量も豊富である一方、ポンプ揚水はコスト高の上に時間給水で取水は十分ではない。現在、取水施設の進歩により、水量は豊富になった反面、河川の他の水利が盛んで、水田減少の原因となっている。

全体的にみて、減反等による水需要の低下や取水施設の進歩により、水利用は水量の安定化、合理化の方向にある一方、水田の減少率は依然として高く、水田に対する関心は薄れている。

再開発事業にともなう池袋の変容

神 作 晶 子

池袋は膨大な数の乗降客を有するターミナル駅・池袋駅を中核にもつ、日本でも有数の大繁華街である。しかし、かつて池袋は駅の外側に人々が出て来ないため、“奥行きのない街”だと言われていた。その理由には、第二次世界大戦後の繁華街形成の過程における、早い時期からの百貨店の相次ぐ進出が挙げられる。特に東西の駅ビルに開店した西武百貨店、東武百貨店は、駅の乗降客の多くを吸収し、池袋の街の性格を決定づける大きな要因となった。

ところが最近数年間、池袋はこれまでとは明らかに違う方向に変容しつつある。その変容は、1978年にオープンしたサンシャインシティと密接な関係を持つものと考えられる。東口には、駅から650メートルほど離れた場所に、面積約6万平方メートルの東京拘置所跡地があった。跡地は国有地であったが、1967年に民間の株式会社払い下げられ、当該会社が主体となって再開発事業が計画・実施された。そして、超高層オフィスビル・サンシャイン60を含む大規模な施設が建設されたのである。本論文の目的は池袋の新しい変容の実態を分析し、東京拘置所跡地再開発事業との関

係を明らかにすることである。

研究の方法は、まず路線価格より中心業務地区(CBD)を設定し、サンシャインシティのオープン前と1986年現在の比較分析を行った。調査項目は地価の変化、建築物の高層化、立体的機能分化、土地利用状況の変化などである。さらにCBDの分析によって判明した事象について統計資料、聞き取り調査等をもとにより深い考察を試みた。その結果、次のような結論が得られた。

まず、再開発事業が影響を及ぼしたのは駅の東口側のみであるということである。従来、池袋は全体に飲食・娯楽の性格の強い繁華街で、そのため街のイメージは概して低かった。東口での著しい変容は、イメージの好転となって表われてきている。これに対し、西口では依然として従来の性格が強く、両者の地域差は年々拡大する様子が見られる。

再開発事業の影響を最も直接的に受けたのは60階通りである。全長322メートルのこの通りは、池袋駅からサンシャインシティに至る最短距離のコースに当たり、また再開発事業の一環として道路整備工事が行われたこともあって、人通りが急